

文化（詳細版）

数千年もの間、太陽の神、天照大神は、生命に欠かせない自然の恵みである太陽の象徴として、日本で崇められてきました。日本でもっとも重要な神社として、伊勢志摩にある伊勢神宮はこの信仰の中心にあります。

今日でも、伊勢志摩の文化は収穫や大漁の感謝をささげるための、古代の儀式や祭りに特徴付けられています。こうしたお祭りは伊勢神宮内やその周りで行われています。その一つが伊勢神宮の神嘗祭で、毎年 10 月、その年に最初に育った米をささげます。漁師や海女と呼ばれる女性ダイバーたちは海での安全祈願のために神社や寺に参拝します。伊勢神宮の別宮である伊雑宮は、漁業・農業地域が恵みを受けることができる信仰場所の 1 つです。生き生きとした祭りは、人々の健康や豊作を祝います。

伊勢神宮以外にも、今なお人々の生活に密着した、多くの神社や寺があります。長年に渡って、青峯山の正福寺は、地元の漁師たちや海女、商人たちが海での安全を祈願する場所です。1 月に開催される寺の御船祭では、大漁を祝うカラフルな旗が全国から寄贈されます。

大王町では、9 月中旬にわらじ祭が開催されます。伝説によると、『ダンダラボッチ』という一つ目の怪物が強風と波を起こしながら里へやって来ました。怪物を怖がらせて退治するため、地元の人々は巨大な藁の草履（サンダル）を作りました。怪物は、この草履を見ると、この里には自分よりも大きな人間がいるのかと思い、怖がって逃げて行きました。現代では、人々は 3 メートルの藁のサンダルを作り、須場の浜から海へ流します。大王町はとても海に近く、歴史的に、この祭りは自然災害を遠ざけるために行われていたと考えられています。

特に答志島には、昔ながらのユニークな伝統がたくさんあります。その 1 つがマルハチのマーク。この印は数字の 8 を表す字である八を丸で囲んだものです。この字は、島の漁業地域で崇拝されている神の

名前、八幡のように『ハチ』と発音することができます。このマークは住民を海の危険から守り、大漁をもたらすと考えられています。毎年 1 月には、八幡祭の一部として、同じ場所にマークを塗り直します。

海女にはセーマン、ドーマンと呼ばれる独自の魔除けの印があります。セーマンは一筆で描いた星形で、海の魔物を追い払うと考えられています。ドーマンは、悪霊を見張る目を表す格子柄です。ともかづきという海女に化けて招いてくる妖怪は、海女伝説の中で、海の危険を具現化したものの 1 つです。

伊勢志摩の家や店舗の入口の上には、しめ縄をよく見かけます。この伝統的な神聖な縄も魔除けになると考えられています。主に稲わらで作られ、米の収穫に対する感謝を表します。邪気を追い払うため、有毒のアセビや、とげのあるヒイラギも縄に加えられています。

伊勢志摩では、日本の人形劇の一種である安乗の文楽など、伝統的な形のエンターテインメントが今なお盛んに行われています。文楽は、語り、三味線（3 本弦の伝統的な楽器）の音楽、人形の動きを組み合わせ、物語を描くものです。人形は細部まで精巧で、人間そっくりであり、眉のように動かせる機能があって、表情豊かです。文楽は 17 世紀にはすでに行われていたと考えられており、その後、18 世紀には江戸と大阪の中継港としてさかえていたこの地の商人たちの支援を受けて発展しました。現在でも、この芸術形式は何世代にも渡って継承されています。毎年 9 月 15 日と 16 日に、安乗神社の境内で上演されます。